

財団だより

多摩川

1997.9 第75号



シマヘビ (ヘビ科)

背中に4本の縦縞。草地や水辺に住み、カエルを好み、他にトカゲや小鳥のたまごなどを食う。

全長1~1.2m



7月23日・24日多摩川流域協議会等主催による「多摩川教室」

■多摩川現風景■

(31) 夏休み「多摩川教室」

毎年おこなわれているこの教室も、親と子が川に親しむたいへん良い機会であり、参加されているお母さんとお子さんも楽しみながら勉強しておられます。今年も、7月23日、24日の2日間、ここ多摩川右岸の二子新地の川原で行われました。堤防の道路を横断するのがちょっと怖いですが、それとても、ちゃんとアルバイトのお兄さんが旗をふって交通整理をしてくれるので安心です。国と自治体が協力して、盛り沢山のメニューを提供しています。ちょっと、キーワードで紹介すると、水生生物、水質調査、生活排水、平瀬川河川浄化施設の見学、水環境ビデオ、水環境情報コーナー、川のはなし、多摩リパアート、ミニ水族館、エコマーク商品、降雨体験車、などなどたくさんのコーナーがあり、親切な係員の方が丁寧に説明してくれます。夏休みの宿題など、ここで材料をいただいと、きつと先生がびっくりすると思います。会場の先の川岸では、水に入って水

生生物をとっている親子が涼しそうです。冷たい麦茶、ちょっとしたみやげまでいただいてみんな大喜びでした。

●関連する財団の研究助成

〈学術研究〉

①住民のための多摩川環境情報の利用提供システムの研究
1993年 生田 茂 都立大学 (No.151)

〈一般研究〉

①児童・生徒・市民のための多摩川観察ガイドの調査研究
1989年 島村勇二 府中市立第7中学校 (No.65)

②河川の学習機能に関する研究—多摩川及び横浜市内河川における子供たちの活動をケーススタディとして
1991年 並木直美 よこはまかわをを考える会 (No.73)

③小中学校の授業における、多摩川環境情報提供システムを活用した環境教育の方法についての研究
1995年 棚橋 乾 多摩市立西永山中学校 (No.97)

④野川における児童(親子)の水遊び場・川遊び行動についての実態調査

1996年 尾辻義和 野川で遊ぶまちづくりの会

(No.102)

多摩川散歩

■国分寺市たんけんマップ■ —農・自然・歴史—

国分寺市のまちづくりと農業を考える懇談会 幹事 石原 一郎



“所変われば品変わる”といわれた時代が遠くに去っていくように思われる没個性の社会になりましたが、国分寺市内は歩いてみるほどに興味を持てる風景や生活の場の表情に個性が見られます。

その主役は営農努力を続ける人、農地、屋敷林や雑木林などです。市内の緑地面積の割合が30%を割るようになった昨今は、農地や雑木林の大切さが殊更に痛感されます。緑地が気候の緩和や保健機能・防災機能に果している効果が大きいので、多くの市民に緑地の大切さを理解していただく資料の1つとして、市民参加による地図づくりが始まったのは1994年のことでした。地図をとおして市内の実情を体感したり気温を調べたりしながら「農のある街」を考える機会にしてみました。

地図づくりにかかわっている人たちは20歳代から70歳代の幅広い年齢層で、地図編集のための調査・取材や描図・イラストなどに携わるのが初めての全くの素人ばかりです。地図化する表現方法や技術については試行錯誤の連続です

が、共通して持っているのは、地域を見つめる新鮮な視点や感性と緑地の維持に努めようとする熱意です。

住んで良かったと思える環境づくりは自分たちの手や足を使っていくことが出発点なのでしよう。

市内には天平時代や江戸時代から伝わる風景や土地にきざまれた歴史があります。多摩川の支流になる野川の源流付近には風水思想をほうふつさせる武蔵国分寺跡があり（南ブロックの地図）、ハケと俗称されている崖線付近の用水路の胎内堀や傾斜地林（西ブロック）、新田開発時代に拓された短冊型地割や乏水性台地を流れた用水跡（北ブロック）の3ブロックが現時点で刊行され、残り2ブロックの編集が進行中です。全て5000分の1の色刷りでA2判の大きさの地図です。

マップをご希望の方は代金と送料を添えて下記にご連絡下さい（1部100円、送料190円）。

〒185 国分寺市西町2丁目34-19
石原一郎 ☎0425-72-7427

農・自然・歴史
たんけんマップ
西ブロック

国分寺市に愛着を感じている私たちは、昔のある風景と心豊かな市民生活が守られる国分寺市を、このようにしてつくっていかねるかを毎日考え、活動している市民の集いです。その活動の一つとして、健康、自然、歴史の遊びマップを作成しました。この日、休みの日には、このマップをポケットに入れて、散歩をさって国分寺の街に出てください。新鮮な発想があるかもしれません。

国分寺のまちづくりと農業を考える懇談会
〒185 国分寺市西町2丁目34-19
石原一郎 ☎0425-72-7427

▲たんけんマップ/西ブロックの表紙

農・自然・歴史
たんけんマップ
北ブロック

国分寺市に愛着を感じている私たちは、昔のある風景と心豊かな市民生活が守られる国分寺市をこのようにしてつくっていかねるかを毎日考え、活動している市民の集いです。その活動の一つとして、健康、自然、歴史の遊びマップを作成しました。このマップは、このマップをポケットに入れて、散歩をさって国分寺の街に出てください。新鮮な発想があるかもしれません。（地図は西と北ブロックの表紙があります）。

国分寺市のまちづくりと農業を考える懇談会 〒185 国分寺市西町2 34-19
0425(72)7427 石原一郎

たんけんマップ/北ブロックの表紙▶

私と多摩川



'97.5.18実施された多摩川クリーンエイド
(大田区・巨人軍グラウンド付近)

一母なる川に抱かれて一

清水正也 (武蔵野市在住)

多摩川に出た！広々とした川幅が、私を包んでくれる。私は、自転車道をせっせと歩く。1996年5月4日のことです。国際スリーデーマーチ、2日目です。私は、35キロコースを選びました。武蔵野中央公園から、井の頭公園そして野川公園を通り抜けて、多摩川へ出たのです。調布市と川崎市に挟まれた部分です。

びっこを引き引き歩いている青年に声を掛けます。「昨日のまめが痛くて、歩けない」と泣きそうです。私は早足でサイクリングロードを歩きます。前に見えるのは、若い女性です。追い付けそうので追い付けない。やっと声を掛けました。

「今日は！福島からですか？福島県のどちらですか？いわきですか？」「今年は、まだ雪があって、スキーしてました。」グラウンドでは、テニスや野球、河原では、テント。葎が水辺を守っています。釣りをたのしんでいる人もいます。

多摩川原橋を渡って、稲城市を歩きます。是政橋まで来たときには、足が痛くて、泣きそうです。それでも、多摩川は、静かに、ゆったりと、私を包んでいます。

昔のことが浮かびます。一人で走って、吉祥寺の自宅から、多摩川を渡って、読売ランドを往復しました。一昨年の5月25日には、多摩川クリーンエイドのキャプテンも勤めました。昨年と今

年は、多摩川園から巨人軍グラウンドのあたりで行いました。20人のチームで、ごみを拾って、分析しました。煙草の吸い殻が1番です。そこで敏蔭雅さんに出会って、多摩川を綺麗にする市民運動を知りました。いつかカヌーに乗って、多摩川を下ってみたいと夢見ています。一昨年の多摩川クリーンエイドの時の『詩』の断片です。

あ、鴨だ！

鴨が 歩いてくる！

2羽の鴨が、よちよちと

恋人かな？

友達かな？

ぴゅー くわっくわっくわっ

川風が、頬を撫でる

川の気を 吸い込んで

吸い込んで 吸い込んで

木陰のくさむらに 腰を下ろす

私の下に 地球がある

雑草が 痛いと呼ぶ

昆虫は もう逃げ出した

だけど どこへ？

広い広い 多摩川の

そのもつと先に なにがある？

夢の世界が あるのかしら？

そこでは 人も草も 虫も鳥も

一緒に生きて 笑ってる

人は 生態系の中でしか生きられないもの

あなたは どう？ 私は どう？

ごみは もうない！

捨てるものは もうない！

90% いかします

そんな 地球が

私には 見えた

今日 見えた

よみがえ

甦れ！多摩川

■城山川・御霊谷川を歩く■

城山川は延長7.10キロ、御霊谷川は延長0.75キロで、八王子市の中央部を流れている一級河川である。城山川の下流端は浅川との合流点にある。浅川と南浅川（72号で紹介済み）の合流点から約200米ほど上流に遡ったところである。河口のあたりは、両岸から灌木に覆われて、五段ほどの階段状の堰を滝のように流れ込んでいる。釣人が二人糸を垂れている。「釣れますか」と聞くと、「鯉が釣れますよ」という。「朝早いと、かわせみがいますよ、小魚を狙っているのですね」という。河口から歩き始め、五反田橋を過ぎて右岸に横川町住宅、横川中学校を見ながら歩いていく。左岸側は田んぼに稲が揺れている。カルガモが数羽、のんびりと泳いでいる。コサギが堰堤に止まって、じーっと水面を見詰めている、小魚を狙っているようだ。三村橋あたりでは流れは川幅の1/3ばかり、両岸から茂みが1/3づつ川を包んでいる。中央自動車道の下を進むと欒橋に至る。橋のもとには欒の木立ちがあり、横川下原公園であり、よく整備されている。サルスベリが満開で、お母さんに連れられた幼児たちが、のんびりとブランコで遊んでいる。しばらく行くと、大沢川が流入している。大きな緋鯉がゆうゆうと泳いでいる。滝原新橋、滝原大橋、上横川橋、しんどう橋と中央自動車道と平行して城山川は流れている。このあたりは土地収用法の事業用地になっており、改修のための拡幅の対象になっているようだ。不動橋の名前は、このあたりの滝不動尊にちなむものである。開戸橋を経て、月夜峯新橋というしゃれた名前の橋につく。このあたりの左岸の側道は全面芝生張りになっており、手入れが行き届いて、たいへん歩き心地がよい。これだけしっかりと芝生がある側道は初めて見る。開戸中橋の手前には川辺に向けて石段が下がって行く。水に親しめるような造りになっている。

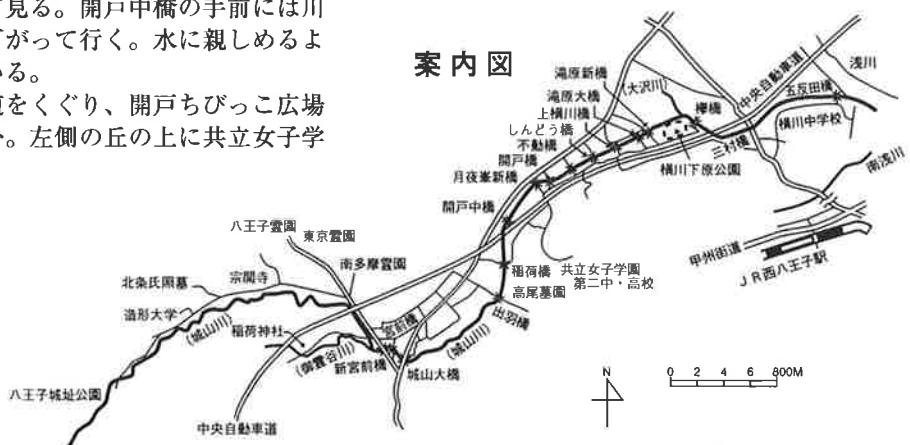
再び中央自動車道をくぐり、開戸ちびっこ広場を左に見ながら進む。左側の丘の上に共立女子学園第二中学高等学校の校舎が見える。このあたりでは城山川は両岸の茂みの中を流れる小川の風情になる。稲荷橋から下流をのぞむと、川の

両側も、川の中も茂みが盛り上がってまるでアマゾンのジャングルの中の川でも見ているような気がする。高尾墓園の下にでると、すぐに出羽橋にでる。欄干がたいへん装飾的でいかにも墓園の入口といった荘重な感じがする。このへんは城山手という高級住宅地で立派な邸宅が並んでいる。出羽橋から先は川岸に民家が迫っており、側道が見当たらない。しかたなく川から離れて、迂回することとした。丘の裾を巡って川が茂みの中を流れている。しばらく行くと城山大橋に出る。このあたりになると水の流れが極端に細くなってきて川床も岩がごつごつとして溪谷の感じがしてくる。川がぐーんと湾曲してすぐに新宮前橋に至る。このあたりで城山川は御霊谷川と分岐する。城山川は北上し、御霊谷川は西に向かう。御霊谷川は750米ほどの短い川である。稲荷神社のあたりで茂みの中に入って行く。神社の境内に、部落の集会所があり、御霊谷会館という看板が掛かっている。そこからもう一度城山川へ戻る。このあたりは、水はきれいだが、ゴミが散らかっている。八王子城跡入口の信号を左折して進む。北側は都営八王子霊園、東京霊園、南多摩霊園など広大な墓地が広がっている。緩い傾斜の道路の両側には石材店が軒を並べている。

道に沿って城山川（このあたりは別名御殿谷川とも呼ばれている。）が流れている。途中で道をそれて八王子城の城主 北条氏照 の墓に詣でる。質素な墓で敗軍の寂しさが感じられる。

八王子城は、城主 北条氏照 が豊臣秀吉の小田原攻めの際、兄、氏政の小田原城に援軍に駆けつけた留守中に一日で落城したそうである。

その後、氏照は秀吉から切腹を命じられ、その一生を終えた。城山川の上流端は杉の木立ちの中に八王子城の堀として現存する。堀の上流は北堀川になって城の周りを巡っている。 翡翠



“多摩川およびその流域の環境浄化に関する調査・試験研究”募集

当財団は昭和50年から表記研究の公募を毎年行ってきました。既に343件の研究に対して助成いたしました。

平成10年度も引き続き首都圏における「多摩川およびその流域の環境浄化に関する基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究」を下記のとおり募集いたします。

記

1. 研究対象者

学識経験者の方はもちろん、一般の方でも研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

2. 研究対象テーマ

(1) 産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究

産業構造の変革により多摩川流域においても従来型の産業が減少し、ハイテク産業が上流域に立地するようになり、自然環境に影響を与えています。

また、住生活においては、中流域で人口の過密化があり、最上流域では過疎化が顕著になっています。これ等都市問題を解決すべく今後の土地利用、都市計画、文化活動等視野の広い観点に立った研究が望まれます。

(2) 排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究

産業排水は法規制等により減少し、現在は家庭雑排水が汚染の原因の多くを占めているといわれています。

多摩川流域においても河川、地下水の有害金属、発癌性物質、農薬汚染、酸性雨等問題化しており

ます。これ等が人間を含む生物にどのように影響を与えるのか、その実態、解決策等の調査、研究を望みます。

(3) 多摩川およびその流域における水の利用に関する調査・試験研究

毎年夏の水不足は全国各地に深刻な影響を与えております。

雨水による地下水の涵養等が各地で試みられています。

多摩川流域における水循環システムについてあらゆる角度から調査研究をして頂きたいと思えます。

(4) 多摩川をめぐる自然環境の保全、回復に関する調査・試験研究

建設省は「多自然型川づくり事業」「魚がのほりやすい川づくり事業」を推進しております。多摩川もモデル河川として親水護岸整備、堰の魚道整備を行っています。

多摩川には年間を通して1600万人もの人々が訪れています。川の自然と人間がいかに共生できるか、環境管理のあり方の研究を含め、課題となっています。

地域住民の視点、研究者の視点で自然環境の保全、回復のあり方についての調査、研究、提言を望みます。

◆公募締切日 平成10年1月16日

応募についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。

〒150 東京都渋谷区渋谷1-18-14

(渋谷地下鉄ビル内)

電話 (03)3400-9142 (財)とうきゅう環境浄化財団

▶▶▶ 寄贈文献の紹介 ◀◀◀

• 「河童子の伝言 一川・歴史・文化論集一」
かわらし

著者 石崎正和 1997年

編集・発行者 石崎正和著作集刊行会 B5版433頁

本書は故石崎正和氏（日本河川開発調査会元事務局局長）が20数年間に亘り、川に関する歴史や文化等について精力的に調査研究された成果を専門誌等に発表、掲載された論文、評論、紀行等遺稿を整理し、故人の業績を偲び刊行さ

れたものです。

主な表題を示すと「近世文書にみる水利技術の系譜」「わが国河川技術の近代化に関する考察」「生き物が共存する伝統的河川工法」「多摩川を診る—治水と川づくり・利水と川づくり・遊水と川づくり」「水の偉人」（井沢弥惣兵衛為永外32名）「農業偉人伝」（ファン・ドールン外39名）他収録。

問合せ先 日本河川開発調査会

TEL 03-3268-8452 FAX 03-3266-0449

第3回 助成研究ワークショップを終えて

8月7日、財団主催による第3回「助成研究ワークショップ」が行われました。今年のテーマは「都市と水循環～多摩川からの報告～」でした。昨年来、多摩川の支流にも、各所で水が干上がって、地域の市民から「なんとか、ならないものか」との声が上がっていました。財団でも川口川、残堀川などの川の枯渇状況を見に行きました。国立、立川あたりを流れる矢川でも水が干上がり、ミクリやホトケドジョウなどの動植物が危機に瀕するような状態もありました。野川についても、狛江あたりでは都の、地下への浸透防止の改修工事にも拘らず水が枯渇した状態が続いているようです。三鷹市では、野川の川沿いに、今後三年間に雨水浸透ますを1500基設置し、地下水の涵養を図るそうです。国家レベルでは、環境庁が井戸、湧き水の復活へ自治体への補助事業を始めることとし、また、建設省の諮問機関である河川審議会では、水利用について、健全な水循環を維持するために、水管理を従来の消費型から、節約、再利用などの循環型にきりかえることを検討しています。「水循環」が身近な問題として大きく取り上げられる状況が現実のものとなってきております。

このような状況を背景として、財団の助成研究のなかで「水循環」に関連するものをえらび、ワークショップを行うこととしました。研究成果の報告、参加者からの質疑応答、さらには、参加者からの提言を加え、立体的に問題のありかを探り、解決の方向を求めたいと考えました。

今回のワークショップは、たいへんな反響を呼び、参加希望者が当初考えていた100名の定員に対し、最終的には152名の応募があり、キャンセル待ちの方々のうち、参加できなかった方が多数ありました。主催者としてお詫び申し上げます。参加者も、財団の助成研究者、学校で環境教育に当たっておられる先生方、環境問題についての市民団体の方々、自治体の環境担当の方々、新しく環境庁が創設した環境カウンセラーの方々など高

度な知識と経験をお持ちの方々が多く、関心の高さに驚いた次第です。

ワークショップは前半と後半に分かれ、前半が各研究者の報告、後半が報告に対する質疑応答、「都市と水環境」についての参加者の提言を行いました。報告は次のとおりでした。

報告1 ①「日野台地の開発と水文環境の変化に関する研究」

②「多摩川流域および周辺地域の文化的遺産としての古井戸に関する研究」
—角田清美—

報告2 「多摩川中流域における地学の教材化の研究」—清水政義—

報告3 「多摩川の支流、平井川における湧水と雑排水流入状況の住民による調査と水環境との関連性の検討」—小山陸子—

コーディネーターは芳村、コメンテーターは千葉大学の藤静夫教授にお願いしました。

報告については、各研究者は、スライドプロジェクター、OHPなどを駆使して、それぞれ30分にわたりわかりやすく情熱をこめて報告を行いました。

後半の総合討論に入り、参加者から提出のあった質問票に基づき、それぞれの報告者から回答を行う形をとりました。質問の中には、かなり専門性の高いものがあり、会場の参加者からの助け船もあつたりして和やかに進行了。各報告者に対し、それぞれ3人～4人の質問があり、内容の濃い、いろいろな意見の交換が見られました。

「都市と水循環」についての会場参加者からの提言は4人ばかりあり、それぞれ、自分自身の体験に基づく迫力あるものばかりで会場はおおきな感銘を受けました。最後にコメンテーター藤静夫先生から、各報告者への丁寧なコメントがあり、全体についても示唆ある指摘がありました。ほぼ時間どおりに充実したワークショップが終了いたしました。

- 発行日 平成9年9月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
- TEL (03) 3400-9142
- FAX (03) 3400-9141

*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1 TEL (048) 831-8125

